

ポパー研究 「哲学の可能性」

(そのⅠ—序および第一章)

高 島 弘 文

序

ポパー (Karl R. Popper, 1902—現在) の思想は最近我国でもかなりの関心を集めているようであるが、このように人々の関心を呼んでいるのは、専ら彼の科学認識論若しくは科学方法論の仕事である。私もまた、彼のこの領域での業績を高く評価することに決してやぶさかではない。私は、特に彼の代表作 ‘The Logic of Scientific Discovery’ に就いては、これは、⁽¹⁾自然科学の世界でニュートン力学がアインシュタインの相対性力学に依って取って代わられたという一大事の結果として当然カントの「純粋理性批判」に置き換えられねばならなかった新しい自然科学認識論であった、とさえ考えている。

しかし、彼の功績は自然科学認識論若しくは方法論あるいはまた社会科学方法論に尽きるであろうか。一般の見解にも拘わらず、私はそのようには判断しない。私の見解としては、それに尽きると考えることは、丁度カントの「純粋理性批判」の仕事をも単に自然科学的認識の確実性の基礎づけとしてのみ理解し、形而上学の再建というカントの今一つの意図を見落とすのと同様の誤りを犯すことである。

私は、ポパーにもカントの形而上学再建の企図に比肩する今一つの看過すべからざる業績が存在している、と判断している。それは、広大な宇宙論的哲学の可能性の探究であった。

「突然完成された革命に因って今日あるようなものになった数学と自然科学の例は、非常に著しいものがあるので、これらの学に利益をもたらした思考法の転回の本質的な点に就いてよく反省し、数学や自然科学が理性的認識として形而上学との類推を許す限り形而上学においても少なくとも試みに自然科学を模倣してみてもどうか、と私は考える。」⁽²⁾「純粋理性批判」中のこの一文は、カントが形而上学を如何にして再建すべきと考えていたか十分に伝えている。

今ポパーを思想史上カントに類比的な存在として捉えようとしている私にとって、上のカントの一文に匹敵しうるものをポパーの著作に発見することはさして困難ではない。

(1) The Logic of Scientific Discovery (1958年) は Logik der Forschung (1934年) の英語版である。本論文ではこの英語版をテキストに用いた。Translators' Note に依れば両者の間に差異はない。なお今後はこの英語版書名を L. Sc. D. と略記する。

(2) Kant ; Kritik der Reinen Vernunft, BXV-XVI.

‘L. Sc. D.’ (1958年) の序文の中に、まず次の一文が見える。「言語分析派の人達は、真
 正な哲学的問題 (genuine philosophical problem) は存在しない、あるいは哲学の問題は
 在るとしても言語使用法または言語の意味の問題である、と信じている。しかしながら私は、
 総ての思索する人々が関心を持つところの少なくとも一つの哲学的問題が存在する、と信じて
 いる。それは宇宙論の問題である。世界の一部としての我々自身と我々の認識をも含めての世
 界を理解するという問題である。」同じ序文の中に彼は次のようにも述べている——「然も私
 は、哲学の唯一の方法と云うような方法が存在することを進んで認めたい。しかしそれは
 哲学だけの特性ではない。それは総ての合理的論議の、従って哲学ならびに自然科学の唯一の
 方法である。私が考えている方法とは、問題を明晰に述べその提起された解答を批判的に吟
 味するという方法である。」⁽³⁾

先程引用したカントの一文が自然科学の方法の模倣に依る形而上学再建を提案しているのに
 類似して、ポパーのそれも、科学の方法と哲学の方法との統一をうたっている。哲学を可能に
 する唯一の方法は、科学の方法と別なものではない。

ところで、カントが上の引用文に言っているところの形而上学が模倣すべき自然科学の方法
 とは所謂実験的方法であった。従って、形而上学においては実験が不可能であるところにカント
 の意図にとって困難が存在した筈である。ポパーにも同様の困難が存在する。彼はこの困難
 にどう対処したろうか。自然科学を実証主義者の考えるような意味で経験的——つまり帰納的
 ——だと考える限り、科学の方法と哲学の方法の統一は不可能である。彼は、まず経験性の概
 念に革命的な変更をもたらし且つ合わせて自然科学の実験的方法の本質を「批判的合理性」に
 見出すことに依ってこの統一を可能にした。

更に哲学は単に「提起されてある命題の明瞭化」あるいは「言語批判」ではない。哲学は、
 科学と同様に「批判的合理性」をその方法の本質とすることに依って、我々自身と我々の認
 識をも含めての世界に就いて命題を提起することができる。哲学は、世界に就いて問題を発見
 し、解答を發明しこれを批判的に吟味する。私は、「世界に就いての問題の発見と解答の發
 明」という観念がポパーの全思想体系の中で最も重要な観念ではないか、と考えている。もし
 私のこの判断が誤っていれば、私のこの論文の価値は恐らく半減することであろう。彼は、こ
 の観念に依って、素朴なものであれ精巧なものであれ総ての実証主義の認識論さらにデカルト
 のそれであれカントのそれであれ総ての過去の合理主義的な認識観を超克することができた
 のである。彼は、この観念に依って、哲学は世界に就いて命題を提起すると言いたのである。
 そして最早言う必要もなからうが、この観念と批判的合理的方法の観念とは不可分離であ
 る。

しかしながら、私の見る限りでは、ポパーは、彼の思想史の発端から哲学の可能性探究を意

(3) L. Sc. D., p.15.

(4) Ibid., p. 16.

図っていたのではなかった。この点でカントが形而上学再建を彼の本来的意図としていたのとは異なる。彼は、真の科学性は何かという問から出発した。そうした彼が、どのような経過をたどって哲学の可能性論証の仕事に向かって行ったのか、そして彼は如何にその論証を成したのか、私のこの論文はこうしたことを説明するために書かれたものである。

第一章 意味の問題

(i)

私はまず、ポパーの思索の歴史が、その端緒において如何なる問題によって開始されたかを明らかにしておかねばならない。彼の関心は、始め、何にあったのか。これを知るのに好個の論文がある。それは1953年の‘Science: Conjectures and Refutations’である。この中で、⁽⁵⁾彼は彼の研究の歴史を回顧しているのだ。

これに依れば、彼の科学哲学の研究は、1919年の秋に「理論の科学的性格あるいは地位の基準の問題」で始まった。そして直ちに1919年から同20年にかけての冬には、「命題あるいは命題体系は、科学的としてランクされるためには、可能なあるいは考えられうる観察 (possible or conceivable observation) と衝突しうるのでなければならぬ。」という解答、⁽⁶⁾簡単に言って「経験に依る反証可能性 (falsifiability), 反論可能性 (refutability) の基準」が発見された。ところで、説明するまでもなく、この科学性の基準は、科学的命題の性格規定であると同時に経験的・科学的理論と非経験的・非科学的理論との区別基準 (criterion of demarcation) ともなるものである。かくて彼は述べている——「それは………経験科学の命題あるいは命題体系とあらゆる他の命題——それらが宗教的性格のものであれ、形而上学的性格のものであれ、あるいは単に疑似科学的のものであれ——との間に、できる限り上手に線を引くという問題であった。」⁽⁷⁾今や全命題界は二分され、経験に依る反証の可能なるものが経験科学の命題であり、その不可能なる命題は総て、非経験的・非科学的命題として分類された。

ここで特に注目しておかねばならぬことは、上の引用文に明らかな如く、彼の思想史の端緒

(5) 1953年のこの論文は論集 Conjectures and Refutations (1963年) に収録されている。なお今後この論集は C. R. と略記し、且つこの論集に収められている諸論文からの引用に際しては、脚注において論文名——論集名——論集頁数の順で記しておく。

(6) Science: Conjectures and Refutations; C. R., p. 39.

(7) Ibid.

この引用文中に「形而上学的」の語があるが、形而上学の概念を厳密に考えて存在論の意味に解すべきではない。宗教、疑似科学、論理学、数学とならんで反証不可能なものとしての哲学の意味に解すべきである。彼は、哲学の非経験性を強調して「形而上学的」の語を用いたのである。この引用文に限らず、彼が区別の問題において形而上学の語を用いる時は常にそうであって、我々は哲学の意味に解すべきである。更にまた、彼が論理実証主義を反論して行なう形而上学の弁護は哲学の弁護と解すべきである。

においては、形而上学的命題は、科学的性格の基準の問題に絡んで、ただ、経験的反証の不可能性という命題の論理学的性格の故に他のすべての非科学的命題と共に十把一からげに取り扱われていたに過ぎないということである。それは宗教やマルクス、フロイド、アドラーらの理論や更には占星術すら含めたところの疑似科学の命題、もっと言うなら論理学、数学の命題とさえ一諸に扱われていたのである。従って「形而上学的命題は経験的反証が不可能である」とは言いえても、「経験的反証の不可能な命題が即ち形而上学的命題である」とは言うことができない。決して形而上学的命題を定義することが、彼のこの時の仕事ではなかったし況して形而上学を定義することが仕事ではなかった。

要するに、彼の研究の出発点では、あくまでも科学に 関心を持つものの立場から「科学的とは如何なることか？」が問われ、それに伴って形而上学は、彼によって発見された基準に従えば、科学ではないものの中の一つとして分類さるべきだというに過ぎない。そこには、これ以上のこと、形而上学に対する積極的関心など何も存在していなかったのである。

今私が述べたことは、以下に紹介する事情によって一層納得の行くものとなろう。彼の科学哲学の起源に関しては、彼の思想は、ウィーン学団の論理実証主義に対する反対テーゼとして案出されたと想像するのが容易であろうが、これは誤解である。事実、哲学史家カークがある文章の中で「ポパーが‘L. Sc. D.’ 1958年版序文に書いているように、彼の科学方法論の態度は、ウィーン学団の企図に反対して形成された」と書いているのに対して、ポパーはその誤解を正すために次のように述べている。「しかし、ここで私の書いたことに就いて書いている人が哲学史家であるので、私は私の書いたことに就いての歴史的な神話をつぼみの内に摘み取っておかねばならないと感じる。というのは、カークが言及している序文において、私の見解や態度を如何にして形成したかに就いては一言も述べなかった。また私は、ウィーン学団に就いても一言も述べなかった。実際、私はカークの説明に似たことを何も書くことはできなかった。何故なら、事実は異なっていたからである。」彼はこれに引続いて「私はマルクス、フロイド、アドラーらの企図に反対して私の態度を展開した」と記している。この点が詳しく語られているのが、私が先程から取り上げている例の1953年の論文なのである。⁽⁸⁾⁽⁹⁾

この中の回顧的な一節に依れば——マルクス主義者達が毎日の新聞の全頁に彼らの歴史理論の証明を見出すことができるということ、新聞の階級的傾斜を顕わすようなニュースの提供には無論のこと更には新聞が何を報道し何を隠すかということにもその証明を発見するということ、あるいは、フロイドやアドラーの理論に就いて言うなら、彼らの理論に依って解釈しえないような人間行動は、これを想像することすらもできないということ、ポパーはこれらの理論の支持者の考えとは反対に、こういう事実の故にこれらの理論を疑似科学と呼び、真の科学性は何かと問うたのであった。⁽¹⁰⁾

(8) Back to the Presocratics ; C.R., p. 156.

(9) Ibid., pp. 156—157.

(10) Science : Conjectures and Refutations ; C. R., sec. I.

以上の如く、彼の回顧録に従えば、1919年に「科学的とは如何なることか？」と彼が問うたのは、直接的意図としては、マルクス、アドラー、フロイドらの疑似科学から真の科学を峻別するための基準を発見せんがためであった。形而上学的命題と科学的命題の区別さえ直接の目的ではなかったのだ。彼の眼中に在ったものは形而上学より寧ろ疑似科学 (pseudo-science) であったのだ。もし仮にポパーが形而上学と科学の区別を中心的関心事としていたら、彼は帰納法を区別基準とするようにならなかつたらうか、と私は想像する。科学と疑似科学の区別を問題にしたからこそ彼は「反証可能性の基準」に思い到ったのであろう。実際、彼が常識に背いて区別基準として帰納法を採ることをしなかつたのは、これに依っては占星術すらもこれを科学から排除しえなくなること考えたからであったのだ。このように考えることが許されるところなら、区別基準として帰納法を採った実証主義者と反証可能性を採ったポパーとの差異は、根底的には、形而上学と科学の区別を求めたものと疑似科学と科学の区別を求めたものとの差異であったとすることができる。

ところでかくの如くに専ら科学に関心を有するもの立場で出発したポパーを形而上学の可能性の問題に関わりを持つように外から仕向ける働きをしたものがあつた。実は、これこそ論理実証主義であつたのだ。

この点を明らかにして行くためには、ポパーと論理実証主義との邂逅の様様を記さねばならない。暫く例の論文 'Science: Conjectures and Refutations' の第三セクションに眼を向けよう。そこには次のように記されている——「今日では、私は無論、この区別基準——テスト可能性、反証可能性の基準——が決して分り切つたものではないことを知っている。何故なら今ですら、その意味は滅多に理解されないからである。その当時、1920年には、私を深く悩ましていた知的問題やまた（例えば政治的問題の如き）明白な実践的結果をも持つような問題を、私のために解決してくれたとは言ふものの、それは、私にはほとんど些細なものに思へた。しかし、私はその有する十分な含意をあるいは哲学的意義を未だ理解していなかつたのである。私がそれを（今では英国の著名な数学者となっている）数学科の学友に説明した時、彼はそれを公表すべきだと提唱した。その当時、私はそれは馬鹿げたことだと思つた。というのは、私の問題が私にとって余りにも重要であつたことから、それは多くの科学者や哲学者を揺り動かしたに違いなく、彼らは必ずや私の寧ろ分り切つた解答に到達しているであろうと私は確信していたからである。実際はそうではないということを、私はヴィトゲンシュタインの作品とそれの受け取られ方とから知つたのであつた。そこで私は13年後、ヴィトゲンシュタインの有意味性の基準 (criterion of meaningfulness) の批判という形で、私の成果を公表したのであつた。」⁽¹¹⁾

論理実証主義と交渉を持つ以前に、彼は全く独自の関心から区別基準を発見し、その後においてこれを公表に踏み切つたのがヴィトゲンシュタイン批判の形においてであつたのだ。実際

(11) Ibid., p. 39.

1919年の冬、彼がこの基準の定式を得た時は、ウィーンにおいてヴィトゲンシュタインの見解が人々の議論のトピックになるより前のことであった。では彼のヴィトゲンシュタイン批判とは如何なる内容のものであったのか。

この頃即ち1933年頃、彼はヴィトゲンシュタインの学説を次のように受け取っていた——ヴィトゲンシュタインの「有意味性の基準」の学説に従うなら、真正なあるいは有意味な命題 (genuine or meaningful proposition) とは原理上観察に依って確かめられうる事実即ち原子的事実を記述するものであるところの原子的命題に完全に還元可能あるいはそれから演繹可能な命題のことであり、科学の命題がそのような命題である。これに反してかかる還元若しくは演繹の不可能な命題は無意味な命題である。かくして形而上学的命題は無意味な命題、疑似命題である。所謂検証可能性 (verifiability) のテーゼである。

ポパーは、上の引用文において、彼の到達した解決は切り切ったものであり誰しも彼と同じ解決に到っていると信じていたのに実際はそうではなかったと言っているが、彼とヴィトゲンシュタインとの間に如何なる違いを見たであろうか。

彼の心中に在ったものは、疑似科学から真の科学を区別するところの「科学性の基準」, 「科学的と非科学的との区別基準」であった。形而上学に対する悪意は無論のこと形而上学を格別に弁護する気持もまた存在していなかった。これに反して彼がヴィトゲンシュタインに見出したものは「意味の問題」, 「有意味性の基準の問題」であり然もそれは形而上学を絶滅しようとする反形而上学的意図に結び付いていたのである。それは「科学的命題は有意義だが形而上学的命題は無意味である」という形而上学根絶のテーゼである。

さて自己とヴィトゲンシュタインとの差異を上のように受け取ったポパーは、ではその後彼の見解をどのように公表したのか。1933年に 'Erkenntnis' のエディター当てに書かれた彼の手紙が同年この誌上に公表された。そこに次のような表現を見ることができる。「このこと即ち区別の問題 (カントの科学的認識の限界の問題) は、それに依って、経験科学に属する主張 (命題, 命題体系) と '形而上学的' と評されるような主張とを区別することができるような基準を発見する問題だと定義されうる。」⁽¹²⁾ 同じ手紙の中に「反証可能性の基準は、形而上学の理論体系……から、……形而上学の無意味性を主張することなく、経験科学の理論体系を十分正確に区別するものである。」⁽¹³⁾ という一文も見られる。

既に指摘しておいたところだか1919年彼の研究の出発の時期には、彼の関心が科学と疑似科学の区別にあったところから、形而上学は科学ではないものの中の一つとしてそのグループの中に分類されていたに過ぎなかった。それが今や、彼が始めに問題にしていた疑似科学は、彼の関心の視野から消えてしまっ、疑似科学と科学の区別が上記引用文では形而上学と科学の区別に置き換えられて来ている。言うまでもなく彼の反証可能性の区別基準に依れば、疑似科

(12) L. Sc. D., p. 313.

(13) Ibid., p. 314.

学と形而上学とは共に宗教、数学などの命題と同一グループに所属するものである。従って上の変化は同一の非経験的命題グループのある成員から他の成員へのポパーの関心の移動を示唆している。無論この関心移動は、ヴィトゲンシュタインの「有意味性の基準」が形而上学と科学の区別基準であり、意図的には形而上学の無意味性の主張であったことに因って惹き起こされたに違いない。

更に見ておかねばならぬことは、この時期における彼のヴィトゲンシュタイン批判である。例えば、上記引用文と同じく例の「エディターへの手紙」の中に次の一文がある。「あたかも実証主義者達は、この区別線を引くことに依って以前の反形而上学主義者達よりは一層完全に形而上学を絶滅することに成功したかの如くに見えるかも知れない。しかしながら、これらの方法に依って絶滅されるのは、形而上学だけではなく、自然科学もまたそうなのである。何故なら自然法則は形而上学的言説同様に、観察命題に還元できないからである（帰納法の問題を思い起こせよ）。それらも、もしヴィトゲンシュタインの意味の基準が徹底して適用されれば、‘無意味な疑似命題’ 従って ‘形而上学的’ だと見えることであろう。かくして区別線を引くというこの企図は壊滅するのである。」⁽¹⁴⁾

これらの引用文は何れも1933年の「エディターへの手紙」から引用したものである。ではその翌年の ‘L. Sc. D.’ においては、彼は実証主義に対し如何なる態度を示しているか。「もし ‘nonsensical’ あるいは ‘meaningless’ という言葉に依って ‘経験科学に所属しない’ ということだけを定義に依って表現しようと欲するのなら、形而上学を無意味な戯言として性格づけることはつまらぬこととなろう。何故なら通常形而上学は非経験的として定義されて来たからである。しかし無論実証主義者達は、形而上学に就いてその命題のあるものが非経験的であるということより遥かに多くのことを言っていると信じている。‘meaningless’ あるいは ‘nonsensical’ という言葉は毀損の評価を示唆するしまた示唆するためのものである。そして実証主義者達が本当に達成しようと欲しているのは上首尾な区別というより寧ろ形而上学の決定的転覆と根絶とである。」⁽¹⁵⁾ 明らかにポパーは、実証主義者の「有意味性の基準」に反形而上学的策略 (anti-metaphysical stratagems)⁽¹⁶⁾ を看取している。

彼らの意図をこのように受け取った上で、彼は彼らの基準を次のように批判する。「実証主義者達は形而上学を絶滅しようと切望して、それと共に自然科学をも絶滅してしまう。というのは、科学的法則もまた経験の基礎的命題に論理的に還元されることができないからである。ヴィトゲンシュタインの有意味性の基準は、もしこれが徹底的に適用されるならば、それら自然法則をも無意味として斥けることになる。ところがそういう法則の探究こそアインシュタインの言うような物理学者の至高なる職責なのだ。」⁽¹⁷⁾

(14) Ibid., p.313.

(15) Ibid., pp. 35—36.

(16) Ibid., p. 37.

(17) Ibid., p. 36.

‘L. Sc. D.’ 第四セクションに見えているこの批判が先程引用した「エディターへの手紙」の中のものと同然のものであることは一目瞭然である。それは彼らの基準が形而上学と同時に科学をも無意味となすということにあるのだ。結局ポパーは、彼らの企図が古くからあった「帰納の問題」につまづくことを言っているのだ。更に次のようにも記されている。「……これは、帰納主義的区別基準は科学的体系と形而上学的体系との間に区別線を引くことに失敗しているということ、何故それがそれらに等しい地位を与えざるをえないかということ、を示している。というのは、意味の実証主義的ドグマの裁断は、両者は共に無意味な疑似命題であることだからだ。かくして科学から形而上学を根絶する代りに実証主義は、科学の領域への形而上学の侵入を導くという結果に到る。」これは同じく ‘L. Sc. D.’ 第四セクションからの引用であるが、ここでは先程と同一の理由によって実証主義の基準に依っては科学と形而上学の区別ができないということに重点が置かれている。以上この時期における彼の实証主義批判は、これを要約すれば、有意味性の基準は、その反形而上学的意図の故にかえって科学の無意味性を招来し従って科学と形而上学の区別に失敗する、というようにまとめることができる。

一方、彼自身の「反証可能性の基準」に就いては、「我々の反証可能性の基準 (criterion of falsifiability) は、形而上学の理論体系から……………形而上学の無意味性を主張することなく経験科学の理論体系を十分正確に区別するものである。」とかあるいは、「これらの反形而上学的策略——即ち意図において反形而上学的な——⁽¹⁸⁾に反して、私の仕事は、私の見るところでは、形而上学の転覆をもたらすことではない。それは寧ろ経験科学の適切な性格づけを式述すること、あるいは我々がある与えられた命題体系に就いてそのより精密な研究が経験科学の仕事かどうか言いうるような仕方、経験科学と形而上学との概念を定義することである。」⁽²⁰⁾というようにこれを表明するに到ったのである。

これら二つの引用文は次のことを述べている——彼の反証可能性の基準は、科学と形而上学の区別基準であって、有意味性の基準とは厳格に区別さるべきこと、即ち彼の基準は形而上学的命題の有意味性を認めつつこれと科学的命題との区別をするためのものであって、決して後者の如く形而上学を無意味として葬り去るためのものではないこと。

彼がこのように彼の区別の問題 (problem of demarcation) と実証主義者の意味の問題 (problem of meaning) との差異を周知せしめようと心掛けていたということは、以下に述べることから明らかである。即ち、彼は上に引用した「エディターへの手紙」を1958年版 ‘L. Sc. D.’ のアペンディックスとして採録するに際して新たに前文を付しているがその中で彼は、「私の手紙における区別基準の問題と意味の基準の疑似問題との間の差異——そして私の意見とシュリック、ヴィトゲンシュタインの意見の間の対照——の力説は、その当時においてさえ私の見解が学団に依って、私は意味の検証可能性基準の意味の反証可能性基準による置き

(18) Ibid., p. 37.

(19) Ibid., p. 314.

(20) Ibid., p. 37.

換えを唱道しているという誤解の下に論ぜられていたが、しかし実のところは、私は意味の問題ではなく区別の問題に関心していたのであった——という事実に因って惹き起こされたものであった。」これに依って見るに、彼が彼の区別基準と実証主義者の意味基準との差異の力説にあのように努めたのは、⁽²¹⁾実証主義者の誤解を除去するためであったのだ。更にまた1955年の論文 ‘Demarcation Between Science and Metaphysics’ も同じく実証主義者のかかる誤解を正すことを目的に書かれている。1953年の例の ‘Science: Conjectures and Refutations’ の中にも同じことが述べられている。こうして見ると彼は、区別基準の問題に就いて書く時には何時でも、この誤解を意識して彼の区別基準の問題と彼らの意味基準の問題とを厳格に区別するという意図をもって筆を運んでいたのである。

さて、これから先へ私の論を進める前に、以上述べて来た全体をここで一度要約整理しておこう。ポパーの出発点は真の科学を疑似科学から区別することであった。これが実証主義との遭遇以前における彼の独自の問題であった。ところが実証主義との接触に因ってまず彼の関心の視野の中で、疑似科学と形而上学との交代が起こり、彼の関心が科学と形而上学の区別の問題に集中すると同時に彼の区別の問題と実証主義者の意味の問題との差異を力説するという意図から、彼はあるいは彼が形而上学的命題の有意味性を認めるものであるという点をわざわざ明白にしたり、あるいはまた実証主義の基準を批判して、それが反形而上学的意図の故にかえって科学をも無意味とする結末に到り結局それに依っては科学と形而上学とを区別しえないことを指摘したのであった。

しかし、このように彼が科学と形而上学の区別の問題にこそ関心を持ったということは、直ちに、彼が両者夫々に同等の関心を払ったということではなかったのである。なるほど彼は ‘L. Sc. D.’ において「私の仕事は………経験科学と形而上学との概念を定義することである。」とさえ述べていた。しかし実のところは、‘L. Sc. D.’ において彼は、形而上学に就いてはただ経験的反証不可能性というその命題の論理学的特性を示したに留まったのだ。これでは、形而上学的命題を宗教や疑似科学の命題から区別することさえ不可能である。‘L. Sc. D.’ は結局自然科学をその命題の論理学的特性即ち経験的反証不可能性と方法論的補遺とに依って定義する仕事であった、と私は見ている。‘L. Sc. D.’ は純粋に、科学に関心を持つものの立場で書き貫かれたのであった。科学と形而上学の区別ということは、決して科学と形而上学の各々に等しく関心を抱くということではなくて、科学の定義の仕事の一環として科学を形而上学から区別することに外ならなかったのである。彼の次の一文がこのことを端的に表明している。「第六セクションにおいて私は反証可能性の基準に依って経験科学を定義しようと試みた。」しかし、⁽²²⁾コンヴェンショナリストの批判が彼のこの意図を不可能ならしめた。そこで彼は引続き次のように述べる。「しかし私は、ある反対意見の正当性を認めざるをえなかったの

(21) Ibid., p. 311.

(22) Ibid., p. 54.

で、私の定義に対する方法論的補遺を約束した。丁度チェスがそれに相応しい規則に依って定義されるように、経験科学は方法論的規則に依って定義されうる。」⁽²³⁾

さて、このように‘L. Sc. D.’が経験科学の定義の試みであり且つその定義が方法論を借りずしては不可能となれば、我々は極めて重大な問を發せずにはおれない——実証主義の反形而上学的理論というのは、言うまでもなく、形而上学に限って無意味とするのではなく寧ろ形而上学を含めて全哲学的命題の無意味性の理論である。従って実証主義者に言わせれば、哲学的方法論は存在しえないというべきである。ということは換言すればポパーの‘L. Sc. D.’の仕事は、正にナンセンスだということである。事実ポパーが‘L. Sc. D.’を書こうとしていた時期に既にかかる批判がポパーに浴びせかけられていたし、また彼がこの時期にこの批判の在ることを知っていたことが次の一文から明らかである。「経験科学でもなければ純粹論理学でもないような方法論は不可能である、何故ならこれらの二領域の外に在るものは全くのナンセンスであるからだ、というのがこの書物の出版前二年の間においてウィーン学団のメンバーによって私の観念に対して提起されていた常時的批判であった。」⁽²⁴⁾

この一文を見れば、ポパーと論理実証主義者との遭遇は、区別基準の問題の場合と方法論の場合とではその様相を全然異にしていたと言うべきである。前者においては、実証主義者からポパーが受けたのは、「反証可能性の基準は、検証可能性が意味の基準として不適切なるが故に、それに代わるものとして提起された新しい意味の基準である」という誤解であった。従って、その時ポパーが急がねばならなかったことは、その誤解を正すことであった。彼が専ら彼の区別の問題と実証主義者の意味の問題との差異を明確にするという意図から一切を述べたのは、この理由によるのであった。彼がこの時急いで言わねばならなかったのは、「私は形而上学と科学を区別しようとしているのであって、決して君達の片棒を担いで形而上学を葬り去ろうとしているのではない。」ということであった。

彼が、「……………形而上学の無意味性を主張することなく……………」と断わることに依って、形而上学的命題有意味の見解をわざわざ表明したのも、また彼らの意味の基準を批判して、それに依っては科学と形而上学の区別ができないことを力説したのも、彼の問題と彼らの問題との差異を明確にするためであった。彼の問題は、共に有意味な科学的命題と形而上学的命題の区別であって、有意味な形而上学的命題をそれにも拘わらず何かの基準に依って無意味と断罪することではない、後者の問題は疑似問題だ——これが彼の言いたいことの全体であつたろう。

彼と実証主義者との根本的差異は、形而上学的命題の有意味性と無意味性との違いである。しかるにポパーはこれまでのところでは有意味性の証明も与えてはいないし、無意味性の見解の反証すら与えていない。何故なら、検証可能性を意味基準とするなら科学もまた形而上学同

(23) Ibid.

(24) Ibid., p. 51.

様無意味となることを指摘しただけでは、反形而上学的意図そのものの不当性を明らかにしたことにならないからである。それでは、実証主義者が新しい基準を物色するのを禁止することはできない。

ポパーが、これまでのところで果たしたことが上記の程度に留まったのは、彼が急いでやろうとしたことが誤解を正すことであつたからであろう。ところが方法論の問題においては様相が極めて険しい。何故なら、ここで彼が実証主義者から被つたのは、誤解ではなくて彼の仕事がナンセンスだという攻撃であつたからである。

彼はこれに如何に対処したろうか。彼はこの時、一つには実証主義の方法論——科学者の現実の行動の、あるいは科学の現実の方法の研究つまり経験科学としての方法論——の観念を斥け、彼の哲学的方法論をコンヴェンションの仕事として性格づける。「私は、この種の問題は違った仕方では取り扱われるべきだと信ずる。例えば、我々は二つの異なる方法論的規則の体系を考案し比較することができる。一つは帰納の原理を持つし、今一つは持たない。その時、我々は、かかる原理が一度導入された場合、それが矛盾を生ずることなく適用せられうるか否か、それが我々を助けるか否か、そして我々はそれを本当に必要とするか否か、を吟味することができる。」⁽²⁵⁾従つて彼に言わせれば、この自然主義的見解の支持者は、本当は一つのコンヴェンションを提起したのであるのに、そうとは気付かないで事実を発見したと主張する誤りを犯すものである。

ところが、彼の第十セクションにおけるこの批判は、実証主義の単に自然主義的方法論の観念のみに向けられたのではなく、実証主義の意味基準の観念にも向けられたものであつた。彼はこのセクションの始めの部分で次のように述べている。「実証主義者は‘実証的’経験科学の領域外に有意な問題——真正な哲学的理論に依つて扱われうる問題——が存在するという観念を嫌う。彼は真正なる認識理論、認識論あるいは方法論が存在するという観念を嫌う。彼は、哲学的問題と称せられるものに、単なる‘疑似問題’あるいは‘パズル’を見ようとする。ところで彼のこの希望(wish)——序でながら彼はこれを希望あるいは提案(proposal)としてでなく寧ろ事実命題として表明するが——は常に満足させられうる。何故なら一つの問題を‘無意味’あるいは‘疑似的’だと暴露すること程に容易なことではないからである。為すべきことと言えば、‘意味’に対して好都合なだけ狭い意味を決めることだけである。そうすれば、何か不都合な問題に就いては、そこに如何なる意味をも発見できないと言わざるをえないであろう。」⁽²⁶⁾ここでは、実証主義者の諸テーゼの中でも最も根本的なもの、有意味と無意味の区別が、彼らの自然主義的見解にも拘わらず本当は一つのコンヴェンションだということが鋭く抉り出されている。カルナップが意味基準に関してコンヴェンショナリズムの思想をはっきりと打ち出した‘Logische Syntax der Sprache’(1934年)が出版されたのは、ポパーが‘L. Sc.

(25) Ibid., p. 52.

(26) Ibid., p. 51.

D.’ 初版の校正中のことであつた。従つてポパーは、‘L. Sc. D.’ においてはカルナップのこの新しい思想を扱っていない。そこにおいては、彼はヴィトゲンシュタインの ‘Tractatus’ に現われた自然主義的見解を捉えて、その隠された本性を上のように暴露したのであつた。

ところで彼は自然主義的意味基準の本性を上のように捉えた後、これをどう批判したか。「私はかくして自然主義的見解を拒絶する。それは無批判なものである。その支持者達は、彼らが事実を発見したと自ら信じている時には何時でも単に一つのコンヴェンションを提起したに過ぎないのだということに気付かない。この故に、コンヴェンションはドグマに變じ易い。自然主義的見解に就いてのこの批判は、その意味基準に対してのみかその科学に就いての觀念従つて経験的方法に就いての觀念にも適合する。」⁽²⁷⁾

實のところ私はポパーが自然主義的見解の隠された本性を上のように鋭く抉り出しながら、それに基づく批判においては実証主義が独断論に墮することを指摘したに留まったことを甚だ残念に思っている。この批判はヴィトゲンシュタインと ‘Aufbau’ のカルナップには妥当しても、最早 ‘Logische Syntax der Sprache’ 以後のカルナップには妥当しない。このことをポパー自身認めている。次の引用文は、彼が ‘L. Sc. D.’ の校正中にカルナップのこの著作を始めて手にして、そこに見られたカルナップの変身振りを知った時 ‘L. Sc. D.’ に注として書き加えたものである。「ここでは簡単に述べられているところの、何が ‘真正な命題’ (genuine statement) と呼ばれるべきであり何が ‘無意味な疑似命題’ (meaningless pseudo-statement) と呼ばれるべきかは決定 (decision) の問題である、という見解は、私が数年間心に抱いていた見解である。(それからまた、形而上学の排斥ということも同様に決定の問題である。) しかしながら、実証主義(そして自然主義的見解)に就いての私の現在の批判は、私の見うる限りでは、カルナップの ‘Logische Syntax der Sprache’ (1934年) には最早妥当しない、そこにおいては彼も総てかかる問題は決定(‘寛容の原理’)に依拠しているという見地を採っている。カルナップの序文に依れば、ヴィトゲンシュタインも数年間、未出版の作品において類似の見解を提起していた。カルナップの ‘Logische Syntax’ は、現在の書物が校正中の時に出版されたのであつた。私はそれを私のテキストにおいて論議できなかつたことを残念に思う。」⁽²⁸⁾

しかし、私の思うに、「意味基準は自然的、本質的、絶対的なものではなく本当はコンヴェンションだ」と指摘した時、彼はそこから実証主義が独断論に陥ることを批判するよりは寧ろ「だから形而上学無意味の教説は成立しえないのだ」と結論することも可能であつたのだ。もし彼がこの結論に到達していたなら、カルナップのコンヴェンショナリズムへの轉換そのものが形而上学無意味のテーゼの自滅作用であると断じえたことであろう。後に論ずる予定であるが、ポパーは後年1955年にはかかる決定的批判に到達する。だが残念なことに ‘L. Sc. D.’ で

(27) Ibid., p. 53.

(28) Ibid.

はそこまで思いが及ばなかったのである。

(ii)

1955年の決定的批判の分析に進むに先立って、我々は1934年の‘L. Sc. D.’と1955年のこの論文との間の時期における彼の実証主義批判を検討せねばならない。我々にとって幸いなことに、1945年の‘The Open Society and Its Enemies’の第十一章の注(No. 51)にかなり詳細なヴィトゲンシュタイン批判が展開されている。我々は、そこに四つの批判を数えることができる。これらを以下において逐次紹介分析して行こう。

第一の批判。ヴィトゲンシュタインは、総ての哲学的命題が意味のない疑似命題であると極め付け、そこから、従って哲学の仕事は命題を提起することではなくそれらを分析することである、と主張する。彼の表現に依れば「哲学は理論ではなく活動である。」今、これをヴィトゲンシュタインのセンテンスの一例として取り上げてみる。このセンテンスは有意味なのか無意味なのか。ところが彼は「真なる命題の全体(the totality of true propositions)が全自然科学あるいは自然科学の全体(the total natural science or the totality of natural sciences)である。」と主張していた。彼のこの主張に従って言うなら、彼の上のセンテンスは真なる命題ではないと言わねばならない。ところが、他方、それは偽なる命題でもない。何故なら、もしそうならその否定命題は真となり、従ってそれは自然科学に属する、という極めて不都合な結果になるからである。かくしてそれは無意味だと言わざるをえない。真でも偽でもない命題、それは無意味である。然もヴィトゲンシュタインの他の大部分の命題に就いてこれと同じことが言えるのだ。彼の学説がかかる結末に到るということは、彼自身これを認めていたところであって、彼は「私を理解する人は、結局、私の命題が無意味であると認めるものである。」と書いているのだ。しかし、彼はまた‘Tractatus’の序文では、「他方、ここにおいて伝えられる思想の真理性は、私には異論の余地なく且つ決定的であるように思われる。」とも書いているのだ。一方では無意味であると認めざるをえなかった自己の命題を、それにも拘わらず異論の余地なく且つ決定的であると主張する——かかることがヴィトゲンシュタインに許されるなら、我々は、彼によって無意味だと断罪された全形而上学的命題を彼の命題と等しく‘deeply significant non-sense’と呼ばねばならない。我々は、無意味な形而上学的命題に依って決定的に真なる思想を伝えることもできるのだ。これが彼の理論の結末である。彼の理論は、形而上学を破壊するどころか逆に形而上学をあらゆる攻撃の手の届かないところに祭り上げてしまったのだ。

第二の批判。ヴィトゲンシュタインは自然科学と形而上学との間に、何か自然的、本性的な区別が存在するように、何か本性的に科学的なものと本性的に形而上学的なものとの存在しているように、考えている。かかる素朴且つ誤れる観念に取り憑かれていたがために、彼は、その本性的区別の発見が科学方法論の仕事だと考え、それが意味、無意味の区別だと断定している。しかし本当は、「哲学的あるいは方法論の仕事は、明らかに、これら二つの間の有益な区別を提案し発明することでしかありえないのだ。」かかる有益な区別は形而上学を無意味とす

ることに依ってえられるものではない。何故なら、その場合、有意味、無意味とは何を意味するかが問われざるをえないのだから、区別の問題は、単に遠くへ押しやられたに過ぎないからである。もし有意味ということが単に科学的ということと等値であり、無意味ということが非科学的ということと等値であるなら、そこには明らかに何らの前進もない。

第三の批判。ヴィトゲンシュタインは「真なる命題の全体」を「自然科学の全体」と同一視する。従って総ての真ならざる仮説 (hypotheses) は、自然科学の領域から排除される。それどころか、我々は仮説というものに就いては真かどうか——仮令、これまでのテストにパスしたものに就いても——決して知ることができない。従って、我々は、仮説が科学に所属するか否か、決して知ることができない。

最後の第四批判。これはヴィトゲンシュタインの「検証の原理」を捉えての批判である。厳密に言うと、仮説は証明のできないものである。従って彼の検証の原理 (principle of verification) に徹するなら、理論、仮説つまり全科学的言説のなかで最重要なものが科学から排除され形而上学と同じ水準に置かれることになる。(ポパーはここで、‘Tractatus’におけるヴィトゲンシュタインの本来の見解は、彼が事実の単なる言明を何時でも遥かに越えているところの科学的仮説の地位に関する困難を看過していた、即ち普遍性 (universality) あるいは一般性 (generality) の問題を看過していたと仮定することに依ってのみ説明されうる、と述べ、ヴィトゲンシュタインがコントの実証主義に従うものであることを指摘している。コントは、周知の如く、一般的事実 (general fact) という言葉の背後に隠されている問題の重要性に気付かないでいたのだ。)

ポパーは、以上紹介した四つの批判を述べた後で、全体の要約として次のように述べている——「要約するに、ヴィトゲンシュタインの‘Tractatus’における意味の反形而上学的理論は、形而上学的独断論や神託的哲学との戦いを助けるどころか、敵——‘deeply significant metaphysical nonsense’——に対し門戸を広く開き、そしてその同じ門戸から最良の友即ち科学的仮説を放り出してしまふところの強化された独断論を示すのである。」⁽²⁹⁾ 彼自身によるこの要約を一読すれば、彼が1945年のこの著作において如何なる観点から、あるいは如何なる意図でヴィトゲンシュタインを批判したかが直ちに分かる。この時彼の念頭に在ったものは、決して、「ヴィトゲンシュタインの形而上学無意味のテーゼは、果して正当か否か」という観念ではない。従ってまた、彼の心中には、形而上学の有意味性を主張しようという意志もない。形而上学を独断論と断罪するヴィトゲンシュタインこそ寧ろ強化された独断論 (reinforced dogmatism) であることを摘発したかったのである。従って、彼の上記批判の中に、形而上学的命題有意味の証明を求めたりあるいは形而上学的命題無意味のテーゼの一般的且つ根底的反証を探し出そうとするのは彼の意図には合わない詮索である。既に論じた‘L. Sc. D.’及び「エディターへの手紙」におけるヴィトゲンシュタイン批判に関しても類似のことが言えた。あの

(29) The Open Society and Its Enemies ; vol. II, pp. 298—299.

時期のポパーのヴィトゲンシュタインに対する批判は、繰り返し述べておいた如く、彼の区別の問題とヴィトゲンシュタインの意味の問題とを峻別し、実証主義者のポパーに就いての誤解を正すという意図に発したものであって、彼の意図していたことは、決して形而上学的命題の無意味性のテーゼを決定的に反証するというものではなかったのである。

もし仮に1945年の批判をポパーの意図を離れて事態的に考察すればどうであろうか。その時には、結局は‘L. Sc. D.’の時期の批判と同一のものしか存在しない。ヴィトゲンシュタインの理論は、科学と形而上学の区別に失敗するということの指摘がそれである。特に第三批判と第四批判がそうである。第二批判も新しいものではない。ヴィトゲンシュタインの科学と形而上学の区別に就いての自然主義的観念は既に‘L. Sc. D.’においても批判された。しかしここにおいても未だポパーはこの観点からの批判を徹底的に押し進めることをしていない。第一批判に到っては、全くヴィトゲンシュタインを独断論者として非難するための議論であってこれを他の観点から見ることができない。

以上の如くであるから、上記批判を事態的に見ても、‘L. Sc. D.’の時期同様に、それは決して形而上学的命題無意味のテーゼの一般的且つ決定的反証とはなっていない。ただこうは言えるであろう——ヴィトゲンシュタインのあの立論では、反形而上学的意図は実現しえないことが明らかにされた、と。

(iii)

さて、ここでいよいよ1955年の論文‘Demarcation Between Science and Metaphysics’に論を進めよう。この論文においては、ポパーの実証主義批判の矛先はカルナップ理論に向けられる。

順を追って論を進めよう。彼は、この論文のカルナップ批判をまずカルナップが未だヴィトゲンシュタインに従っていた‘Aufbau’における検証可能性基準の批判から始める。しかし、それは‘L. Sc. D.’以来のヴィトゲンシュタイン批判の繰り返しであると見てよく本質的には新しさが無い。次の一文を上げておこう。「この基準（筆者注——意味の検証可能性基準のこと）は、あらゆる科学的理論（あるいは自然法則）を意味の領域から排除する。何放なら、これらは所謂形而上学的疑似命題同様に観察報告に還元できないからである。かくして意味基準は、科学と形而上学の誤った区別に到る。」⁽³⁰⁾

ところが1934年の‘Logische Syntax der Sprache’あるいは1936年の‘Testability and Meaning’においては、カルナップは、ヴィトゲンシュタインの影響からの脱却を示した。この時期のカルナップ理論として注目されるのが意味の確証可能性基準（confirmability criterion of meaning）と人工言語理論（theory of artificial language）とである。周知の如く、両者は、検証可能性基準が科学的法則を無意味となし更に形而上学的命題を有意味領域から排除しえないという二つの欠陥を夫々に克服する道として発案された理論であった。

(30) Demarcation Between Science and Metaphysics ; C. R., p. 261.

ポパーは、この二つを夫々に批判して見せる。しかし確証可能性基準に対する批判には、今ここで格別に取り上げねばならない新しさはなく、これまで彼が検証可能性基準に対して行なったものと本質的には同一の批判である。つまり、それは、この基準もまた科学的理論や自然法則を無意味として排除するという意味で「科学と形而上学との区別に失敗する」ということに尽きる。カルナップの確証 (confirmation) の概念が 'weakened verification' に外ならない限りけだし当然であろう。カルナップの狙いは、基準を緩めることに依って、厳しい基準——検証可能性基準——では排除されたものを救いうるということに在ったろう。しかしポパーは、普遍的法則は時間的に無限な世界では零度の確証度しか有しえないし、たとえ有限な世界でも十分な大きさを有する世界においてなら、その確証度は、殆んど零から区別しえない程度だと考える。実は、彼のこの分析は既に 'L. Sc. D.' の第八十セクションにおいて示されていたものであった。今それを引用してみよう。「人は、仮説に対し——恐らく余り正確なものではないが——ある確率を、その仮説がパスした全テストの未だ企てられていない全テストに対する比率の見積りに依って与えることだろう。しかしこのやり方でもどうにもならない。何故ならこの見積りは、生憎、正確に計算されることができそしてその結果は確率零ということであるから。」⁽³¹⁾

他方、人工言語理論に就いては、ポパーはこれを如何に批判するか。ポパーの批判に進む前に、一応考えて見ておきたいことは、人工言語理論の有する意義、その目的である。カルナップのこの理論は、一般には、科学から形而上学的不純物を排除し、科学を実証性において純化しようとする試みである、と解釈されている。

しかしポパーは、カルナップのこの試みが矢張り反形而上学的策略、形而上学的命題を無意味として絶滅しようとする企図と結合していると受け取るのである。例えばポパーは、カルナップの意図を読んで次のように述べている——「彼は寧ろ、形而上学から免れた科学の言語 (a language of science free from metaphysics) を構成することに依って彼の形而上学無意味の見解を正当化すること (to justify his view of meaninglessness of metaphysics) を、反形而上学者に課せられた仕事あるいは義務であると見ている。」⁽³²⁾ 確証可能性の基準が検証可能性の基準の後を受けて、それが失敗した形而上学絶滅運動の継続であることは言うまでもない。先程も述べたように、検証可能性の基準が厳し過ぎるが故に科学と形而上学の区別に失敗したことを省み、それに代わるものとして提起されたのであった。これが提起されたという事態はポパーの検証可能性基準の批判、ヴィトゲンシュタイン批判が決定的、根底的なものではなかったからである。それは反形而上学的意図そのものは粉碎しえず、従って意図実現の為の新しい理論の案出を許したのである。さて確証可能性の基準がそのようなものであると共に、今やポパーに依れば人工言語理論もまた自然主義的理論の遺志を継いで反形而上学的意図

(31) L. Sc. D., p. 257.

(32) Demarcation Between Science and Metaphysics ; C. R., p.274.

と結合している。然もその結合の仕方をポパーは上記引用文において甚だ明確に把握している。即ち人工言語理論は形而上学無意味のテーゼの正当化、証明の理論である。ポパーは、この理論をかかものとして捉え且つその観点から批判するのである。カルナップは果して形而上学無意味のテーゼを証明しえたか——これがポパーが検討しようとすることである。そしてこの検討は、カルナップは果してよく形而上学から免れた科学の言語を構成しえたか否かを吟味することに依って実行される。少なくとも、もし科学の言語を構成することに依って形而上学無意味のテーゼが証明されうるとするなら、確かに議論の構造は上述した如くなることであろう。実はこの点に問題が在るのであるが今はそれは措くことにする。

ポパーの裁断は次の通りである——「我々が科学において言いたいことの総てを含むがしかし常に形而上学的と考えられてきたセンテンスを排除するような科学の言語を如何にして構成するか、という問題は望みの無い問題である。それは、典型的な疑似問題である。」⁽³³⁾要するにこうである。形而上学から免れた科学の言語——「かかる言語は一つとして構成されることができない。」⁽³⁴⁾正にそれ故に、ポパーの見解に依れば、カルナップは形而上学無意味の見解を正当化することに失敗したのである。上のポパーの反証は、こと人工言語理論に関して一般的である。その反証は、単にカルナップに依って構成されたある人工言語が形而上学的センテンスを排除しえないということではなく、それを排除するようなものは一つとして作りえない、と言っているのだ。彼が上記引用文において言っている「常に形而上学的と考えられてきたセンテンス」とは、所謂存在命題 (existential statement) のことである。

私は結論を急ぎ過ぎたようである。彼の反証の内容を簡単にでも説明せねばなるまい。科学の言語 (language of science) とカルナップが呼ぶもの——それは固より普遍命題を必ずや含まねばならない。従ってまた、科学の言語は、普遍命題の否定命題をも許容せざるをえない。何故なら、普遍命題を科学の言語に含めることに依って有意味とするなら、その否定命題もまた有意味でなければならず従ってこれをも科学の言語は含まざるをえなくなるからである。ところが普遍命題の否定は所謂「存在命題」である。そして存在命題は形而上学的命題である。ポパーは、実際に、例えば「全能、遍在、全知の人格的靈が存在する」という極めて形而上学的な命題が、カルナップの 'Testability and Meaning' において提示されたものに類似の物理主義言語 (physicalistic language) において表現されることができ従って有意味なセンテンスとして構成されうることを示している。かくして、カルナップが、そこから追放しようとしたにも拘わらず、明らかに形而上学に属する命題が彼の科学の言語に入り込んでいるのである。「しかし私は、それは科学の外あるいは科学の言語の外に落ちる、あるいは、それは無意味である——とカルナップが言いうるとは考えない。」⁽³⁵⁾

今、上述したポパーのカルナップ批判を省みる時、我々は、物理主義言語という僅か一例に

(33) Ibid., pp. 276—277.

(34) Ibid., p. 274.

(35) Ibid., p. 276.

就いて行なわれたにも拘わらず、彼のこの反証が総ての「科学の言語」に妥当することを理解するであろう。何故なら、科学の言語である限り必ずや普遍命題を含まねばならず、従ってまた総ての「科学の言語」が必ずや存在命題を含むからである。

以上、形而上学から免れた「科学の言語」を作ることは不可能であり、それ故に「かかる言語を構成することに依って形而上学の無意味性を証明する企図」は完全に失敗に帰した。然もポパーの反証は一般的である。しかし、ここで力説しておかねばならないことは、先程も触れておいた如く、この反証は、ただ、人工言語理論に依る形而上学無意味の証明に関して一般的あるいは決定的であるに過ぎないということである。

しかるに、人工言語理論に依る形而上学無意味の証明は、形而上学無意味の証明として、実は、十全なものではないのである。従って、上述の如きポパーの反証では、形而上学無意味のテーゼの反証の仕事としては、決して論を尽くしたものとは言えないのである。

そこで今暫くポパーの論ずる処を探ってみなければならぬ。この論文における彼のカルナップ批判は、実のところ、決して以上に尽きるものではない。見逃してはならないと思われるのは、カルナップがコンヴェンションナリズムの立場を採ったという正にそのことを捉えての批判である。彼は述べている——「しかしながらカルナップは、彼の新しい観念を述べるに際し非常に注意深い。彼は、我々は多くの‘科学の言語’の間で選択するのだ、と言っている。また彼は、‘経験主義の原理’——それは形而上学無意味の原理の別名ということになるが——は、寧ろ一つの主張としてではなく、科学の言語の選択の‘提案’あるいは‘要求’として述べられるべきである、と言っている。かかる述べ方であれば、形而上学を無意味として排除するという観念は事実上放棄されたものと考えられうる。何故なら、形而上学者は、かかる提案は如何なるものも受け入れる必要がないしまた明らかに受け入れはしないであろうからである。彼は、絶対、その代りに、それに従えば（ある適切な言語において）形而上学が有意味となるような別の提案をすることであろう。」⁽³⁶⁾ポパーがこのように述べているその基底には、彼はそうとは書いていないけれども、形而上学無意味のテーゼがそれこそ有意味・真正であるためには、本質的に (essentially, intrinsically), 絶対的に (absolutely) 無意味であるという以外には無い、という観念が存在していることは明白である。この基底観念に立脚して批判するなら、カルナップが自然主義からコンヴェンションナリズムへ転換した時、彼は形而上学無意味のテーゼを完全に放棄したことになるのだ。

私は‘L. Sc. D.’におけるポパーのヴィトゲンシュタイン批判を検討した際に、その終末の部分で、ポパーの自然主義批判を紹介しておいた。それに依ると「自然主義的見解は、本当は一つのコンヴェンションに過ぎないものを発見された事実あるいは本性であるかの如くに誤解しているもの」であった。私はその時、ポパーが切角かかる指摘をしておきながら、そこから「自然主義は独断論に陥る」という批判を引き出したに留まって、「だから形而上学無意味の

(36) Ibid., p. 274.

テーゼは根本的に成立不能である」と結論しなかったことを惜しんだ。しかし、今やポパーは、カルナップの自然主義からコンヴェンショナリズムへの転換を具に検討した後、そのことに気付いたのである。ポパーは、ある箇所でカルナップ理論の発展を簡潔に概括した上で次のように書いている。「私の意見では、素朴あるいは自然主義的理論から一層精巧な理論への発展は、甚だ重要且つ望ましい発展である。しかし私の見うる限り、その意味は十分には察知されていない。それが形而上学無意味の教説を全く破壊するということが、明らかに気付かれていないのである。」この一文は、科学の言語の構成の失敗を言っているのではない。先程来私が力説してきたこと即ち自然主義からコンヴェンショナリズムへの後退そのものの破壊の意味を訴えんとしたものである。自然主義的理論から人工言語理論への移行は、他の面では「重要且つ望ましいこと」であったにせよ、こと形而上学無意味の教説としては寧ろその崩壊に外ならなかったのである。何故なら、この教説はもし仮に成立しうるなら自然主義的教説としてのみそうでありうるからである。

以上を一度要約しておいて先へ論を進めよう。コンヴェンショナリズムの立場で形而上学の無意味性を言うのはそれこそナンセンスである。このことに気付いている支持者は、「形而上学は経験的に無意味である」などという言い方をする。そのようなゴマカシの言い方は止め、「形而上学は非科学的である」と彼らは言うべきである。彼らが言っていることのゴマカシのないところは、本当は、僅かこれだけのことなのだ。結局、コンヴェンショナリズムへの転換は、形而上学無意味のテーゼの放棄である。従って、もし本気で形而上学の無意味性を唱えるなら、飽くまでも本質的、絶対的無意味性の証明をこそ提示すべきである。

では、形而上学的命題の本質的、絶対的無意味性を証明するためには、一体、人はどれだけのことを為さねばならないのか。そして、その為さねばならないことを、果して実証主義者は遂行したか否か。もしかかる観点から実証主義を批判するなら、その時にこそ批判は真に決定的、根底的であるということが出来る筈である。私は、1955年のこの論文を精察する時、かかる観点からの批判をそこに発見しえたのである。事実、彼は次のように述べている——「本質的無意味性の証明は、単に経験科学を満足させる全言語に関してだけでなく、総ての首尾一貫した言語に関して妥当するものでなければならぬことを理解することが重要である。」⁽³⁸⁾形而上学的命題に就いて、もしかかる証明が提示されることができたとすれば、その時には確かに形而上学的命題は、科学に属しないことが示されただけではなく全く訳の分からぬおしゃべり (sheer gibberish) であることが示されたことになる。注意しておきたいが、ポパーはヴィトゲンシュタインとカルナップの本来の意図は形而上学の絶対的無意味性の断罪に在ると見ていた。また既に力説しておいた如く、絶対的無意味性以外に有意味な「無意味性の概念」は存在しえない。ポパーが上記引用文に示している本質的無意味性の証明の概念に照らして見るな

(37) Ibid., p. 259.

(38) Ibid., p. 264.

ら、仮令カルナップの「科学の言語」構成の仕事が成功していたとしても、それだけでは不十分な証明に過ぎない。然もこの不十分な証明すらポパーに依って完全に反論されたのである。ポパー自身が事の次第をこのように把握していたことが次の引用文から明らかである。「このこと（筆者注——形而上学の絶対的無意味性）を示すためには、それが科学の要求を満たす諸言語で表現されえないという趣旨の証明を提示するだけでは全く不十分であろう。しかしこの不十分な証明すら、科学のために形而上学から免れた言語を構成するという幾多の企図にも拘わらず誰に依っても決して出されなかったのである。」⁽³⁹⁾

では一体、証明が総ての首尾一貫した言語に妥当するということが可能であろうか。ポパーに依れば、そのためには、ある形而上学的命題が、総ての首尾一貫した言語において無意味なセンテンスになるというだけでなく、更に形而上学的命題を書いたり話したりする人が、自分が言おうとしたことに等しいと認めるような有意義なセンテンスが如何なる首尾一貫した言語においても存在しえないことも証明されなければならない。「かかる証明が如何にすれば多分与えられうるか、かつて誰一人として示唆したものはなかったのである。」とポパーは述べている。⁽⁴⁰⁾ ヴイトゲンシュタインにしてもカルナップにしてもかかる証明を試みなかった、それどころか如何にすればかかる証明がなされうるか語ることもさへなかった。私は、ポパーは上の引用文において、そもそもかかる証明が不可能なることを言外に示さんとしているのではないかと推測する。私は以上の考察に依って、そのことに成功したか否かは別としても1955年のこの論文には形而上学無意味の教説の決定的、根底的反証の意図が含まれていたことは確かだ、と強調したいのである。⁽⁴¹⁾

なるほど、全体として見た時には、この論文のテーマは、彼自身述べているように「科学と形而上学の間との区別は意味と無意味の間との区別に一致することを示さんとしたルドルフ・カルナップの繰り返しての企図は失敗した。」⁽⁴²⁾ というところに在ったろう。しかしこのテーマはヴイトゲンシュタイン批判のそれと同一である。だがしかし、もしこの論文のカルナップ批判を過去のヴイトゲンシュタイン批判と比較した時の特質を問うなら、それは、私が言うように、形而上学無意味の教説そのものの決定的、根底的批判に存する、と言うべきである。この論文での彼の批判的論議の構造は、科学と形而上学の間との区別を意味と無意味の間との区別に還元しようとする企図を反論するために、確かに一つには、意味、無意味に依っては両者を区別しえないということを論拠としていた。例えば確証可能性基準の批判がそうであって、この基準では科学の法則もまた無意味になってしまうという点が指摘された。かかる批判的論議の構造はヴイトゲンシュタイン批判のそれと同一のものである。また人工言語理論の批判もやり方によっては上のものと同一の構造になりえたであろう。ただこの場合は、上の場合とは逆に、明ら

(39) Ibid.

(40) Ibid., pp. 263—264.

(41) Ibid., p. 264.

(42) Ibid., p. 253.

かに形而上学的な命題が科学の中に入り込むという理由で意味、無意味に依っては両者を区別しえないという結論になるであろう。ところが、彼は実際には人工言語理論をもっと別のやり方で扱ったのである。即ち、形而上学無意味のテーゼの証明としては、どれだけのことがなされねばならないか、そしてそれは成されたかあるいは成しうるか否か、という観点から批判的論議を構成し、この論議の中に人工言語理論の批判を組み込んでいたのである。そして形而上学無意味のテーゼの証明は、人工言語理論によっても果されえないし、かかる証明はそもそも不可能であるということ——つまり形而上学無意味のテーゼの決定的、根底的反証を論拠として「科学と形而上学の間を意味と無意味の間を区別に還元すること」の不可能性を結論したのであった。

以上に依ってヴィトゲンシュタイン批判とカルナップ批判とでは、なるほどそのテーマは同一であっても、批判的論議の構成の仕方、批判において用いられる論拠といったものに著しい変化が見られる。大雑把に言って、始めは、それに依って科学と形而上学を区別することはできないということに力点がおかれたが、後には、形而上学無意味のテーゼそのものの反証に力点がおかれた。ポパーの議論のかかる変化は何に因るのか。もとより、論理実証主義の側の理論の発展に応じて、それを批判するポパーの議論も深まりを見せたと言することができる。しかし、私はこの変化を単にかかる外在的理由だけで説明するのでは不十分であると考えている。実は、ポパーは、後に論ずる予定であるが遅くとも1948年頃には既に意味の問題とは別個な問題つまり方法論において宇宙論的哲学の可能性に就いての確信を抱くようになっていたのである。1955年のカルナップ批判はこの確信のもとに書かれたし、かつてのヴィトゲンシュタイン批判はそうではなかった。この確信を抱いていた1955年のポパーは自ずと形而上学無意味のテーゼそのものの反証に力を入れずにはおれなかった、と考えて自然ではあるまいか。

とは言うものの私の見解では、序文で述べておいたポパーの宇宙論的哲学の可能性探究の仕事において、意味の問題に関する彼の実証主義批判は決して余りポジティブな意義を有するものではない。しかし過去の形而上学者が書きあるいは話した全形而上学的命題が残らず有意味であると証明することは、不可能でもあろうし、また彼にとって不必要なことでもあったが、しかし一切の形而上学的命題が無意味であるということだけは完全に反証する必要があったのである。